

Title	ピグウ教授の産業変動論に就て
Sub Title	
Author	小高, 泰雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.5 (1931. 5) ,p.659(43)- 688(72)
JaLC DOI	10.14991/001.19310501-0043
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310501-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英國をして貿易戦上の勝利者たらしむるに資するものと思惟せるなり。(ibid., p. 69.)

是れよりも稍や遅れて學校都市を建設せんとする最も精巧なる計畫がローレンス・ブラッドンによりて行はれたることは吾人が前掲「近世初期の失業對策と就業權論」中に於いて述べたるが如し。(同四〇—四二頁參照)。

斯くの如き時代的背景と類型の提案とによりて考ふるに、ペラーズは必ずしも「經濟學史上に於ける一奇觀」たるものに非ず、又、斷じて社會主義的思想家として論ぜらる可きものに非ずして、彼れの所論はマーカントリストの見地に立てる貧民勞働搾取策の一特殊形態として觀らる可きものなり。

ピグウ教授の産業變動論に就て

小 高 泰 雄

抑も、景氣理論は恐慌の分析的研究の結果、經濟社會の週期間變動原理に注目するに至つて初めて、恐慌論に於けるよりは、より大なる對象に向つて、而して全然新なる面目を以て、出現したものである。現今景氣理論として、或は、産業循環論として種々雑多の議論が提出せられてはゐるが以上の如く、景氣論が恐慌論の必然的所産であつた關係上、今尙其の舊殻を蟬脱する事なく、専ら興味を中心に恐慌に繋ぐか或は週期性其のもの原因關係を發見する事を以て足れりとし、此處に於て解決せらるべき問題其のものを明瞭し、分解し、之を統一し、他の學說と交渉ある箇所を明にし、之を批評し、之に適當なる地位を與へたるものは尠い。之に反してピグウ教授の産業變動論に於ては問題を三箇に分類し、第一産業變動を生せしむる所の短期間に於ける勞働の需要計劃を變動せしめる直接的或は第一次的諸原因、第二は、之等諸原因をして累積的發展を可能ならしむる所の條件、第三諸原因中産業變動を週期的に生せしむる所のもの分析換言すれば、週期性的原因としてゐる。而して、他の學說の主張する所が何れの部分に該當するかを暗示し、之を批評し重要性あ

りと考えられるものに就ては適當の考慮を拂つて、自説を建設すべき用材としてゐる。如斯き研究方法は、紛糾混亂を導き易き動態經濟の中心問題たる産業變動の理論的觀察を行ふ上に大ひなる參考となるものではないかと考えられる。

次に「産業變動論」の異色と目せられる所のものは、數量的觀察を重視してゐる事である。數量的觀察換言すれば、統計的研究が産業循環理論に於て重要な事は敢て喋々する必要はない。カッセル教授は謂ふ。

「經濟科學に於ては、産業循環の一章は、事實の本性に據つて決定せられたる歸納的取扱の最も代表的な例である。拙著「社會經濟理論」に於て、私は事業循環に關する部分に對して、純然たる歸納的方法を用ひ、産業組織の決定的勝利より、歐洲大戰の勃發に至る時期を通して、常に起つた所の均勢ある發展よりの最も代表的偏倚を明瞭ならしむる所の統計的數字を蒐集し、調整する事に盡めた。或る批評家は私が、最初の部分即ち靜的或は、準靜的狀態の研究に於て用ひたる演繹的方法より突如として、此の方法に移つた事を非難して居る。併し此の變化は決して獨斷的のものではない。否反對に、靜的研究より動的研究に推移したる事によつて、必然的に決定せられたものである。(註一)

ヒ教授の統計的研究に當つて執られたる數字取扱上の技術に於ては、頗る幼稚なものがある。近來米國に發達した所の數理統計上の原理に依つて、總ての數字を取扱つたならば、或は教授の採つて以て、結論の抽出なり、或は他説の反駁なりに引用した所の數量同基礎に立てる論據は、可成りの變革を蒙りはしないかと考えられる。教授は、私は若し、幸にして、パーソン教授の最近の統計技術を會得して居たならば、私の議論を更に擁護すべき武器を持つ事が出来たであらふ。(註二)と述べてはゐるが、由來尤大なる數字を使馳する場合に、其の數字の示す眞實性の存否は、半以上は、かかつて統計技術の巧拙如何による。殊に他の數字と比較する場合に其の然るを見る。パーソン教授の方法が自己を守る楯となるか、自己を攻むる槍となるかは頗る疑しい所である。

技の巧拙はともあれ、數量研究を基礎として、議論鏖攻の筆を起し、行論上常に、統計を反省し、苟くも統計上の證明を與えらるると考へらるる箇所に就ては究々として、之を參照して居る事は、「産業變動論」の一大なる特色である。景氣論の理論的研究と統計的研究とが、各、其の分野に蟄居して、他を顧みる所なきは、頗る遺憾と考えられる所であるが、近來漸く理論的研究に對して、統計的研究を參酌するもの多きは喜ぶべき傾向である。教授の本書は、此の傾向に對して、他の一の促進的要素を與えたるかの觀がある。

「産業變動論」に對する批評中最も眞剣且最も系統立てるものは、ホートレー氏のなせるものの右に出ずるものはない。故徳田博士はヒグウ教授が自働的調節論に立脚せるが故に其の立場は一顧の値もなき事を指摘し、「英國現代の大家たるヒグウ教授が同しく一流の學者たるホートレー氏に對して、今日まで繼續して挑みつつある論戰は私を以て見れば、確に此の評(自働的調節の可否)を免れ難きものである。私は元よりホ氏の信用一點張の議論に加擔するものではないが、併しヒ教授の論戰に於けるホ氏の立論さは、如何なる劍橋黨と雖も、讚嘆せざるを得ざる程水際立つて優越の地位

を確保するものなる事を認めざるを得ぬのである」と、今、之等の論争の詳細に觸れて、兩者の應酬を一一記述する事は、問題の紛糾を招來する恐れあるが故に、茲には、ホ氏の批評の要點を明にし、私を以て見れば寧ろ中心の問題たる物價の變動の景氣變動に對する重要性に就ては、兩者の立場の相違を明にする様に努めた。

(註一) The Fundamental Thought in Economics, p. 29

(註二) Industrial Fluctuation, 2nd Ed. 1929. Pre. vi.

Income-getting power.

扱ヒ教の所謂「産業變動」は社會全體としての所得獲得力或は生産力の割合が平均して約七年を週期として循環的變動を示す所の事實を指稱してゐる。(註一) 而して此の産業變動は労働に支拂はるる賃銀總額の變動と密接に一致して居る。(註二) 然るに賃銀總額は産業變動の如き短期間の經濟現象に就ては、單に雇傭者の労働に對する需要計劃の變動にのみ據つて決定せられ、供給計劃の變動は、無視して差支ない、故に産業變動の原因は、労働需要計劃を變動せしむる原因でなければならぬ。而らば需要計劃は如何にして變動するか。夫は社會全體に生ずる實際収入の量的變化に據るものではなくして、事業家の産業的支出より生ずる利潤に對する期待の變化に據る(註三)。此の利潤に對する期待を變化せしむる原因は分れて三となる。一、實在的原因、二、心理的原因、三、自律的貨幣上の原因之である。

假第一の實在的原因とは「現實の産業の狀態に既に生じ或は將に生ぜんとする變化よりなる。故

に此の變化を基礎として行はるる期待は眞實であり、理由ある期待である。(註四) 此の種の原因として數えられるものは、(一)收穫高の變動(二)技術上の發明或は改良(三)鑛脈其の他の發見或は開發、(四)労働争議、(五)嗜好の變化等であるが、其の内最も重要なものは(一)及び(二)である。

今貨幣信用存在せざる社會を假想して見ると、農産物の増收は農村社會をして、農産物の名辭を以てする工業産物の需要を増大せしむ。若し、工業社會の農産物に對する需要の伸縮性が單位(unity)以上なか或は、以下なる場合に於ては、必ず産業活動力の變動を伴ふ。何となれば、前者に於ては、從來より以上の産物の製造となり後者に於ては、之を減少せしむるからである。然るに統計の示す處によれば、伸縮性は單位以上である。(註五) 故に豊作は産業活動力を増大せしむ。換言すれば、利潤の期待を好轉せしめる。之がビ教授の論法であつて、教授は此の論法を以て、他の總ての實在的原因を検討してゐる。

之に對してホートレー氏は謂ふ「我々が需要の伸縮性が單位以下であると謂ふ時は或る財貨の産額の増加が其の増加の割合以上の價格の下落を發生せしむる場合を謂ふ。若し、人間努力を以てする貨幣の購買能力にして變化なしとすれば、より大なる産額の貨幣價值は、より少なる産額よりは少額のものとなるであらふ。……大體の農産物に對する需要は伸縮性なきものであると考えられる。パンに於て然り……棉花羊毛皮革の如き原料も亦同様である。肉類其の他の日用品の如きは、或る階段に於ては、伸縮性あるも、尙且、供給が消費の慣習率以上に昇る時は、在荷夥多となるものである。……故にビ教授の議論にして正當なりとすると豊作は産業活動力の萎縮と結合する事

を常となる。(註六)

ビ教授が農産物に對する需要の伸縮性が單位以上なる事の證明として持來つたものは、米國に於ける農産物の收穫と産業活動力の兩指數の間に正の相關關係の存在する事を證明せるジエブオンス、モーアー及び、ビ教授の統計的研究であつた。ホ氏は、一國に於ける農産物の收穫が他の諸國に比して、增收を見、而して、之が世界的價格を以て販賣せらるる時は、其の增收を見たる地方の産業活動力を伸張せしむるのは當然である。此の事は宛も米國の事情に適合してゐるのであつて、米國は其の農作物の豊作を通して、(一八九一年、一九〇二年、一九一一年)他の世界各國の産業の循環的運動とは、獨立せる短期の循環を示してゐる。又ビ教授が認めたる原則即ち、世界的市場を有する商品全部に對する伸縮性は、或る地方より來る特殊的部分に對する伸縮性よりは小なる事、及び産業變動の世界的性質よりして、收穫と産業活動力との比較は共に、全世界に渉る收穫高の豊凶と全世界に於ける産業活動力の伸縮を比較しなければならぬと主張する。

ジエブオンス教授が「太陽熱と産業活動」(Sun Heat and Trade Activity. Plate II)に發表せる大麥の世界産額(一八八八年—一九〇五年)と英米佛の物價指數(産業變動論第一編第一章)とを比較するに、兩者の間には微弱ながら積極的相關關係の存在する事を認め得るのであつて、少くとも消極的關係の存在してゐない事だけは確信し得る。然し乍ら、此の比較は僅に大麥の産額に限られてゐる事であるからして、之を以て直ちに需要の伸縮性が單位以上であると斷言する事は出來ない。又、農産物の生産額の増減と産業活動力との指數の關係を移して直ちに其の需要の伸縮性の大小と結合せしめ得るか否かは疑問である。何となれば、相關關係其のものは、因果關係の解決に寄與する所尠いからである。

農産物が全體として、之に對する需要の伸縮性が單位以上にあるか或は以下にあるかを決定する事は頗る困難なる問題である。農産物の種類に由り、市場の廣狹に由つて、重大なる相違ある事を考える。現今日本のみならず、全世界の襲來せる不況状態の原因は結局する所重要農産物殊に、小麥、棉、砂糖、珈琲等の世界的産額が、二三年來の豊作の爲めに、價格の激減となり、農村社會の購買能力の衰退に起因するとは可成り有力な主張であると認められる。若し、其の議論にして、正當なる時は、結論に於てビ教授の理論は顛覆する事となる。ビ教授の理論にして若し誤りなしとすれば、目下は寧ろ世界的好景氣の時代となるであらふ！併し乍ら、以上の理由を以て直ちに農産物に對する需要の伸縮性が單位以下なりとする事は稍、早計に失する。現今生産事業の經營に於て、生産に要する原料の不斷の供給を確保する事は可成り重要な問題である。之が爲めに各生産事業は、相當量の原料品を手許に持越す事となり、其の結果、原料價格の下落從て起る製品價格の下落は、現實に損失を發生せしめる事となるのは見易き所である。其の製品に對する需要の伸縮性にして單位以下なる時は、生産の規模は忽ち縮少せられ原料に對する需要の激減となり、之が價格下落の勢を一層助長する事となる。

次に農産物の收穫の増減と並んで、重要性ありとせらるる發明發見、例令、過去に於ける鐵道或は電氣事業等の發展が第一次的原因として擧げられてゐる。此の種の發明發見は、其の結果生じ來

つた所の生産力の増大に由つて、景氣上昇の原因となるのではなくして、其の發明發見を實際經濟社會に持ち來し、其の効用を發揮せしむるが爲めの、諸設備に對する投資の増大に伴つて、一般活動の増大を來すのである。若し、ロステイブンスンが鐵道を發明しなかつたならば、一八四五年より一八四七年に亘る鐵道敷設熱に基く好景氣は齎されなかつたかも知れないけれ共、何等か他の方法を以て、之に類する好景氣は來たに相違ない。鐵道は單に活動力を昇進せしむる所の通路を供給したに過ぎない(註七)とはヒグッ教授の認むる所である。故に發明發見の如きは、ヒグッ教授の實在因の分類中の第四なる需要の變化に之れを挿入すべきであらふ。

産業活動力の變化は、事業家の利潤の期待の變動によつて齎される。利潤期待の向上は、價格の變動を考えざる場合には、販賣高の増加と一致してゐる。而して、販賣額の増加は、勞働に對する需要の増加を促す。此の意味に於て、利潤の期待と勞働に對する需要計劃との間に關係のある事は明である。ヒグッ教授が産業變動の實在因を論じたる際に執つた所の態度は明に一財貨の生産額の變動或は何等か經濟的事情の變動が果して一般的に生産力を増減する程有効なるや否やを検討して、以て其の重要性を決定せんとするにあつた。産業變動は「實際貸銀額の割合に於ける變動と密接なる關係を有してゐる。」故に、例令は、「收穫の變動は利潤の期待を變化し産業變動を生せしむるものである。」とする事は同時に、收穫の變動は之に依つて生ずる産業活動力の變動と同じ割合を以て實際貸銀額の變動を伴ふ事を認むるものである。實際貸銀額の増減は、新に勞働者を雇傭するが解雇する場合もあるし、又既存の勞働者の能率を上下せしむる場合もある。此の事は貸銀支拂の方法や、

勞働者の賃銀政策に依つて異なる。然しヒグッ教授の見解に従へば、既存の勞働者能率の上下よりは、直接に勞働の雇傭解雇の行はるるのを一般的のものと見てゐる事は、失業率指數を以て景氣、不景氣の標準的指數として可成り重視してゐる事に徴して明である。されば、需要の伸縮性ある收穫の増加に依つて生ずる産業活動力の増加は、之と同じ割合を以て、勞働者を雇傭する事となる。此の事を以てホ氏は、農産物と交換せらるる所の他の財貨の限界効用が増進して、勞働の限界非効用(marginal disutility of effort)との均衡を失したる場合に新なる均衡を齎す爲めに、要せられる勞働増加の直ちに行はるる事を認むるものであるとす。(註八)

「例令需要の伸縮性が單位以下なる一貨物の生産額が増大したとする、すると、其の貨物の生産者は、他の財貨をより、少く消費する事となり、他の生産者は、自己の貨物及び互に他の貨物をより、多く消費する結果となる。約言すれば、全貨物の限界効用は減少し、努力の限界的非効用との均衡を破らるる事となる。全生産的努力は其の努力の成果よりは大きとなつて、漸次減少する傾向をとる。反對に需要の伸縮性大なる貨物の生産増加するは、他の貨物の限界効用は増大し、全生産的努力は其の成果より以上に少となり、増加せられる傾向をとる。」(註九)

然るに、ホ氏は、如斯き状態は、自己の計算を以て自から、勞働に従事して居る者に就のみ謂ひ得る所である。即ち、一貨物の生産増加して、從來より容易に易らるる事となると、彼は其の物に對する需要の伸縮性により容易に、自己の勞働を減少する事も増加する事も出来るからである。然るに、之以外のものに就ては、しかく、容易に現實し得るものではない。

「産額の決定が限られたる少数の雇傭者の行ふ所であり、而して、其の産業の労働者は受動的に雇傭せられ、當時の貨銀率を以て、慣習的労働時間だけ労働する場合に於ては、雇傭者の企圖は純利純を以て決定せられ、總收入額 (Gross Proceed) を以ては決定せられない。此の事實は、ビグー教授の議論を全然破壊するものである。」(註一〇)

「總收入額が何等かの原因を以てより、誘引的なる總體をなす時は、雇傭者は、より多量の「貨銀材」を労働者に移轉する地位にある。併し乍ら、貨銀材のより大なる分量、或はより誘引的なる總體は、貨幣貨銀が減少せらるるか或は、物價が上騰するかして、貨物の限界効用と、労働の限界的非効用との不均衡が市場に於て鮮明せらるるに非ずんば、實際に於てより大なる分量の労働を購入しないであらふ。長期間を採つて考えると、労働の價格と限界生産力とは一致し、又、價格に適合する様に労働を供給せんとする傾向はある。」(註一一) 然るに、此の長期間に於ける傾向も漸次に薄弱となる。何となれば、「人間の努力が生産的となるに従ひ、人々は全體として、漸減する労働量の生産物を以て満足せんとするに至る。労働時間の短縮の如きは其の一例で、労働の名辭を以てする全體の富に對する、需要は、極度に伸縮性なき事を示すものである。」(註一二) が故である。故にビグー教授の主張する如く、貨幣貨銀と富の總體の「誘引力」との短期間の整調は望めなす。

純利潤は一定貨幣額を以て、より誘引的の富の總體を代表するけれ共、貨幣を以てする名目額は、貨幣或は物價の何れかに適當なる調整の行われるにあらずんば、影響せられなす。

「又一定貨幣額に依つて現さるる富の誘引性の變化に由つて、企業家の態度は本質的に影響せられなす。」(註一三) 企業家の心理に現われる状態は學者の「眞實」(reality)とは異つて、前者は所謂眞實を貨幣利潤を通して、「貨幣に依つて代表せられる貨物を考へて、初めて發見するのである。」理想的な經濟人は現在の貨幣の購買力を以て、將來受取られ、更に其の後消費せられる貨幣の誘引力を測定するものではなす。」(註一二)

「要するに生産者が例令、貨幣の名辭を以てせず、富の名辭を以て考慮した所で、其の態度に變化あるものではない。生産者の側に生ずる個人的努力の量と彼の産額との間には、密接なる關係はなす。」(註一三)

又操業短縮は生産者に對して、非常なる損失を齎す。利子、維持費、減價、監督費等の確定一般經費は彼の總利潤から支拂わるるもので、其の總利潤は産額と正比例するものである。産額の一定率の減少は、一定率の總利潤の減少となり、一定率以上の純利率の減少となる。更に屢、利潤を減失せしむる事すらある。

例令、今或る生産者が、一年拾萬磅の生産額あり。總利潤は、其の産額の二割で貳萬磅、一般經費壹萬五千磅、収入五千磅とする。今八分の一の生産減少ありたりとすると、其の収入即ち純利潤は半分となり、四分の一の減少あるときは、利潤は全然減失する。

「操業短縮より生ずる損失は如斯、甚大であるからして、生産物の効用と、努力の非効用との見事な平衡と謂ふ如きは全然、期待し得る所でない。同様に、此の事は労働者の場合に就て見ても不可能である。」(註一三) クラーク教授の所謂労働の需要が平常點以下に降ると、需要曲線に交叉せる供

給曲線は垂直線となる。何となれば、彼は、其の特殊産業に適する様に仕上げられたる以上、彼が一定の労働時間に働く實質費用は実際上は零となる。「努力の限界の非効用は比較的重要性乏しき時間外労働の事情を外にしては、一要素となるものではない。」(註一四)

(註一) ビ教授は一八五〇年より一九一四年に至る英國の失業率指數を圖表し、之に三ヶ年移動平均を施したる結果、平均的週期 7.47年、振幅 3.8%なる數字を得た。

(註二) Industrial Fluctuation, p. 18.

(註三) ビ教授に據れば、労働に對する需要は、二箇の方法を以て變動する。(一)労働の結果に對する期待、(二)割引率の變動である。割引率は、(A)公衆の將來に對する一般的态度の變動並びに(B)公衆に取得せられる收入の流れの量的變動に由つて變化せしめられる。然るに(A)は産業變動の如き短期間の經濟現象に就ては考慮する必要はない。故に労働に對する需要は、「事業家が與えられたる新資本額より收受する所の實際收益に對して抱く期待の變動か、或は、社會體に生ずる實際收入の量的變動かに由る」(Ibid. 90)教授は、後者を以て産業變動の原因なりとする理論の主張者をツガンバラノフスキーに見出し、之に對して、教授は、在貨量は好景氣に蒐積し、不景氣に分散する事實を擧げて反駁してゐる。

(註四) Ibid. p. 35.

(註五) 之に用ひたる統計上の證明は、専ら米國の材料を用ひたものであつて、ジエブオンス教授の合衆國に於ける製鐵産高と農産物産高との比較(Contemporary Review, Aug. 1909)ムーア、教授の同種研究(Economic Cycles, p. 110)がそれぞれ兩者の間に高度の相關々係ある事を示してゐる。

(註六) Trade and Credit, p. 145-6.

(註七) Industrial Fluctuation, p. 50.

(註八) Trade and Credit, p. 148.

(註九) " " "

(註一〇) " " "

(註一一) " " p. 149.

(註一二) " " p. 150.

(註一三) " " p. 151.

二

次に直接的影響の問題である。前章に論じたる實在因に基て生したる利潤に對する期待の變動が飽く迄も合理的に、換言すれば、事業家の心理に對して何等樂觀悲觀の態度を生せしむる事なく、正常なる判断の下さるる事を假定する時は、一般に産業活動力の上に生ずる變動の極大限を決定し得る。茲に於て明にせられたる事は、(一)其の産業と直接關係ある産業は勿論、後者と關係ある産業にも影響して生産活動力の變動は倍加せられる。(二)併し其の變動は累積的增加或は減少を伴わざるものである。

實在因を論じたる際に示したる通り、實在因中一般的に重要性を有するものは、生産技術の改善と農産物收穫の豊凶であつた。故に例令、如斯き實在的原因が生じた所で、其の結果として、活動力に影響する所尠い場合には、直接的變動の問題は起らない事となる。然るに、ビ教授は直接變動の理論を屢々一般的方法を以て論じてゐる。一産業が原料の不足とか、労働争議とか、需要の減退

とか其の他の原因に依て、生産活動を減殺したとする。すると、其の産業の労働者は減少し、從て、他の産業の生産物に對する需要を減退せしめる。故に、後者の労働も亦減少し、需要も從て減少する。恐らく、ビ教授の理論よりすれば當然の歸結である。併し乍ら、我々は或る一貨物に就ては、多くの場合、其の代換物を考え得る或る種の産業の活動力の減退は、之と代替的關係に立つ他の種類の産業の活動力を増進し、全體としての活動力は不變である場合は、寧ろ一般的事情ではあるまいか。

ビ教授が好んで農産物に對する需要の伸縮性の問題に觸れ、夫れが單位以上なる事を以て、産業活動力を變動せしむべき最大極限を量的に決定せんとしてゐるけれ共、然も其の伸縮性が單位以上ある事を證明せんとして、忠實に採録したる統計(農産額と農産物價格の比較)は却て、教授の期待を裏切つて、單位とすれすれなる事を證明し、教授を驚かしめてゐる。(註一) 若し教授の擧げた統計を其の儘に解釋して單位と同等なりとすれば、何等の直接的變動は起らない。一般に農産物の一定率の増加は一定率以下の價格の下落を生ずる事は前掲の通りである、故に、直接的變動としては、一般産業活動力を減少せしむる方面に於て論せらるべきであらふ。

何れにしても、教授の立場からすれば、直接的變動は頗る微少なものである。何となれば、事業家が樂觀或は悲觀の誤謬を侵すにあらざれば、累積的發展は不可能だからである。詳言すれば、一産業が活動力を増進した。其の影響を受けて他の産業が生産力を擴張し、順次に他の産業に波及して、遂に、其の影響は最初の産業に迄、複歸し、之が活動を増大し、再び上述の道行が繰返えされ

て行く事は、事業家が需要の増加を過大に評量する所謂樂觀的誤謬を侵す事を前提とせざる以上は考え得ざる所であつて、若し之を可能なりと見るものあらば、夫は總て「虚構」であるとするからである。(註二)

私は今茲て、心理的原因を除外して累積的運動が可能なるや否やに就ては深く吟味しないけれ共、「産業變動論」の末葉に於て「諸要素に相要的重要性」を決定したる場合に「若し、心理的誤謬を全然取り去る事が出来るならば産業變動は半分だけ其の範圍を減少するであらふ」(註三)と述べて居る事は、何等の理由も示されてはゐないが如何なる根據から割り出されたものであるか。ビ教授に依れば心理的原因は總ての原因中最も主要なるものである。之に次で、實在因であつて、所謂貨幣的原因の如きは殆んど顧みられてゐない。然も其の主張なる原因たる心理因は五〇パーセントほか重要性を持ち能わぬとすれば、何等か他の心理因以外の要素が或る程度迄前段の累積的運動を可能ならしむるものではないか。

(註一) 直接的變動に於て、教授が農産物に對する需要の伸縮性の單位以上なる事を證明せんとの願念を以て顧慮したる統計は、パアソン教授が (Review of Economic Statistics, 1921, p. 34-36) に發表したる、一八七九年より一九一三年に亘る農産物産額と同價格との關係に就ての統計である。之に就て見るに、十二箇の重要農産物を包含する産額及び價格は、稍々完全なる消極關係(相関係數 -0.8) を示してゐる。更に重要なるは、十八年間に於ては、其の内二箇年が同様の方向に動き他の一七年に於ては、反對に動いてゐる。若し、需要の伸縮性が單位以上なりとすれば、兩者の振度は、其の割合を異にするとしても同様なる方向を採るべきである。故に教授は之を以て「稍々驚く可き

§ J (Industrial Fluctuation, p. 61) となしたのである。

(註二) Industrial Fluctuation, p. 57-70.

(註三) " p. 220.

三

次に來る問題は心理的原因である。心理的原因とは、「産業を統制するものが事業上の豫測を行ふに當つて、不當なる樂觀或は悲觀的誤謬を伴ふ所の心的調子に生ずる變化を謂ふ。」(註一) 而して此の心的調子の變化は、前條の實在的原因の生じたる場合、其の結果生ずる需要に就て過大なる或は過少なる評價を行ふ事に端を發する事もあるし、又樂觀の單なる反動として悲觀に、悲觀の單なる反動として樂觀に所謂相互依存的發生も認められる。而して後者は斷然優勢なる地位を有するものであつて、「樂觀的誤謬は今將に死なんとして悲觀的誤謬を生み去る事となる。而も悲觀的誤謬は嬰兒としてではなく巨人として生れ來る。」(註二) 此の種の原因關係は産業變動の幹根なをしてゐるを見るのである。(註三)

扱一産業に樂觀或は悲觀的誤謬が生ずると、夫は頗る非合理的方法を以て産業界全般に波及し、發展し、其の間何等相殺作用は行はれない。即ち、一方の悲觀的誤謬と他方の樂觀的誤謬とが相殺して其の發展を阻止する事はない。(註四)

然るに心理的原因と實在的原因とは、相互依存的關係にある。(註五) 而して、實在的原因を基礎として生ずる期待は眞實であり、理由ある期待である。「眞實の期待とは、ビグウ教授の立場からすれば、恐らくは、需要の伸縮性が單位以下であるか以上であるかを基礎として生ずる期待である。然し乍ら、茲では、實在的原因のさうした意義は全く失われてゐる。何故ならば、心理的原因は、非合理的方法を以て發展するからである。

此の點に於ける教授の所説を補足して、事業家の下す判断、豫測は常に、或る程度の眞實性と誤謬性(心理的)とを兼ね備えてゐる。そして其の割合は景氣の上昇とか、下降とか謂ふ局面の極點に近づくに隨つて誤謬性は擴大し、眞實性は縮小して行くと謂ふ見方は最も正鵠を得てゐると考へる。教授自身も誤謬の發展に於て「部分的の正常化」即ち、誤謬の判断の下に行つた所の活動力の伸張或は縮小が實際上の結果に照して或る程度迄其の正常なりし事を證明する事あるを認めてゐるのであるからして、さうした補足を加えて見ると、教授の謂ふ所の誤謬の一般化は可成り信據するに足る一面の眞理を道破しゐると考えられる。

ホートレイ氏は謂ふ。「假令悲觀的誤謬が或る産業だけに影響を與えたとする。此の産業に屬する生産者及び雇傭者は、消費を節減し従て一般貨物に對する需要を減少する……悲觀的産業の産額は、從來の消費量以下に降り其の在荷量は減少する。之に反して、他の産業に於ては、産額は從來の消費量以上となり、在荷量は増加する。茲に於て他の産業の採るべき方法は、(一)其の産額を減少するか(二)從來通りの生産を維持して、悲觀産業の生産貨物と自己の生産物の交換比率を變化して、從來より多量を提供するか何れかである……若し、前者なるときは、「悲觀的誤謬」と唱へらるるものは何もない。何となれば、悲觀は其の目的を表して、正常化せられ、却て、誤謬は他の

産業が、従來比較的に樂觀的なりし事に存する。後者ならば、悲觀産業の利潤は却つて好轉し悲觀する事の無用なる事を明にする。(註六)

然し、此の説は私を以て見れば必ずしも正當であるとは考えられない。總て樂觀的誤謬悲觀的誤謬は忽然として平靜なる産業界に生し來るものではない。此の二個の誤謬は交替的に發生し、何れか一が常に事業の彼を導いてゐるのである故に前例の様に一産業だけに悲觀的誤謬が生じたる事が充分有意義であるが爲めには、産業全體が樂觀的誤謬を侵す事、既に充分深く、事實上、總ての方面に生産の過剰が生して居る事を背景として考えなければならぬ。かゝる場合に於ては、ホ氏の所謂第二の事情は發生しないと考えられる。然らば第一の事情は如何にと謂ふに、此の場合に於ては或る程度の正常化は行はれると考える。併し完全なる正常化が行はれるとは謂えない。何故なら、今A産業は自己の生産物と交換せらるる唯一の貨物の生産者と假定せらるるB産業は、近き將來に於て1/3の生産の縮少を行ふべき事を豫想し、之に對して有利なる状態に立んが爲めに1/2だけ生産額を縮少したとする。而もB産業が同様なる考慮の許に、1/2だけ生産を縮少したとすると、事實に於て兩者の期待は裏切られて誤謬は誤謬として残るからである。

本邦に於ては、徳田博士は、ビグウ教授が景氣變動の原因を樂觀的誤謬と悲觀的誤謬に求めたる事を不可なりとし、そは、『早く賣抜き』『早く買占』めんとする競争の結果である。景氣變動の兆候の見え初むるは、此の競争は激成せられる。價格騰貴の兆候の看取せらるる時は、何人よりも先に買占め、

誰人よりも先に生産し、誰人よりも先に供給を確保せんとする。其の反對に價格下落の兆候の見え初むる時は誰人よりも先に『賣抜き』『誰人よりも先に需要を確保せんとする。雇傭勞働に對する需要は此の競争の一手段として取扱れる』博士の擧げたる例に據れば、「三十萬噸二百艘の需要増加の形勢が生じ、其の事が當事者の間に稍、熟知せられたりすると、一萬噸を生産しつつありしものは、二萬噸十萬噸を生産しつつありしものは十五萬噸と謂ふ具合に成可く多くの部分を自己の手に取らんとして競争する。其の結果は八十萬噸となつて供給の過剰となる。夫は樂觀的誤謬に陥つたが爲めではなくして、現實に而して多かれ少かれ正確に見積られたる需要の増大の成る可く多くの部分を自家の手に獲得んとする競争の結果である」(註七)と、

惟うに此の説は現代産業生活の根本的基調を以て『競争』にありと見る限りに於ては、相當に有力なるものである。併し競争が如斯き重要な意義を有してゐない事は、現今トラスト、カルセル其の他企業の集合が漸次に一般化しつつある傾向の中に觀取する事が出来る。根本的基調は寧ろ自己信頼の習性強く、將來に對する先慮の一層重視せられ、熟慮的且つ、自由の取捨選定の多く行はる(註八)ことを以てすべきではないか。若し然りとするならば、一企業の利得とか損失とか謂ふ事は時に競争の結果である事はあらふけれ共、夫は、副次的な場合であつて、一般的には寧ろ、自由裁量の基礎に立つ豫測判断が合理的であつたか或は何等かの缺陷を包含してゐた事に由るものであると解釋すべきである。事業盛衰の基礎は、合理的判断正鵠を得たる豫測が行われたるか否かに依存するものであつて、競争の結果ではない。競争が現に行われてゐる事は争ふ餘地のない所である。

然し相手を破壊する目的を以つて行われる所の殺人的競争は別として、需要の増加減少を見越して成別多くの部分を其の手に收めんとする競争は、企業家の立場よりして、多少とも正確なりと考えられる豫測の結果招來せられるものである。例今前掲せる福田博士の例に據れば、三十萬噸二百艘の需要増加が見越されたる場合に自個の生産力を二倍とし三倍とする事は單に競争に由つてより大なる利益を擧げんとするが爲めにはあらずして、諸般の事情を考慮したる結果、將來の需要増加に對して自己の生産物が喰ひ込み得る程度を合理的に判断したる結果生産力を二倍とし、三倍とするに至つたものである。諸般の事情とは、即ち、同種企業家の生産能力とか、將來に於ける之が增加の程度、及び、現在の在貨量の額、並びに、將來に於ける需要の變化、物價信用等の變動等であつて之等の事情を考慮せずして盲目的に暴進する事は殆んど考え得ざる所である。然して、其の豫測の客觀的確實性は、之等諸般の事情に就て正確なる智識が得らるるか否かに據る。然るに、現今の經濟制度に於ては此の種の事情を正當に考慮する事は殆んど不可能である。故に、或る特定時に於て、一企業家の下す判断は、多かれ少かれ、誤謬を包含するものであつて、殊に其誤謬は當時の一般的人氣たる樂觀或は悲觀的心理状態に據つて、多大の影響を與えられるか故に、同種企業家が同一の方嚮に向つて、不當に生産の擴張縮少の行わるる事となるのである。此の點に就ては、ビ教授の見解はより有利ではないかと考えられる。

高田博士は謂ふ「ビグワの心理説が充分成立するか爲めには見込の錯誤の全部がすべて樂觀的氣分の作用であると謂ふ前提が成立しなければならぬ。併し乍ら、私は考ふる。如何に平靜なる氣持を以て事業を經營せるにもせよ國民經濟の全部を通して一定の財の生産のどれだけ擴張せられつあるかに就て明確なる知識と報告がなき場合、價格と生産費と利子との比較に於て、可成の企業利潤の見込があれば、更に資本を注ぎ込むと謂ふのは、自然の成行ではなからうか。所謂競争的眩惑は樂觀の所産にあらずして合理的なる錯誤そのものに外ならぬ」(註九)と、

錯誤の全部が心理的誤謬に由つて醗酵せられてゐる事は、事實因の直接的影響たる活動力の變動が累積的運動を示すものでない事に徴して明である。然らば、博士の所謂合理的錯誤は如何に解釋すべからざるか。抑も合理的錯誤とは何を意味するかに就て、博士の説明はないが恐らくは豫測を組立てたる材料に不備缺陷の存する事を指すものと考えられる。生産力の限度を決定するに當り、物價、金利、需要、生産費等の事項に就て、詳細なる調査を行ふのであるが之等の事項に就ての情報に誤りがあるか或は、之が判断に誤りがあるかして、不當に利潤の見込を擴大したり、縮小したる結果を生ずる事であると考えられる。然し乍ら、此の種の合理的錯誤は重要な意義を有するものとは考えられない。何となればこうした錯誤は一般化する程の要素を具備して居ないからである。總ての企業家が、特定時機に於て、各、合理的錯誤を通して、不當に利潤の期待を擴張することは考えられないのみならず、寧ろ、一方の消極的錯誤と他方の積極的錯誤とが相殺して全體としては平靜を維持する可能性さえも見出されるからである。合理的錯誤の一般化を主張する爲めには、總ての錯誤の中に共通的要素の存在する事を必要とする。其の要素こそは移して心理的誤謬のもとに一括せられ得べきものであらふ。然し此の間の關係に就て、ビ教授の明確なる説明なきは、遺憾であ

る。

(註一) Industrial Fluctuation, p. 73.

(註二) " " p. 92.

(註三) 心理的誤謬の範圍は如何にして決定せらるるやと謂ふに、第一、實際に行はるる豫測を作出す所の當事者の腦力の優劣である。第二、株式會社設立に關連して、一般民衆が彼等の前に提供せられたる提案を理解し、之を判斷する腦力を缺く事である。(Anarchsell "money, credit and Commerce p. 26r.) 第三は、豫測外出者に適當なる情報の入手するや否やの程度である。第四は勞働及び或る種の原料は先物を購入する事が出来ない。故に、將來引渡すべき貨物の價格は其の費用を豫測して附するのが普通である。而して、殆んど總ての生産者は、他の生産者が同様な行動に出でてゐる事を知らずに各々豫測を通じて原價を計量するが故に、勞働又は又の原料の需要が市場に現はる時は、費用項目は豫測以上に増大する事となる。第五は資本蓄積力に對する豫測の誤謬である。金利の低下せる時機に企圖せられたる事實が其の後の補給資本を得んとする時意外の金利高に直面するは之が爲めである。(Cassel "The Theory of Social Economy, vol. ii, pp. 626-7) 第六は、需要の生ずる市場の廣狹である。

(註四) Industrial Fluctuation, p. 85. 一般化せられた誤謬が可能なりとし、之を助長する要素として教授は、第一、事業家の間に相互依存の關係のある事、第二、豫測上の誤謬にある程度の合理化の行はるる事、第三、事業者間に借借關係の存する事を擧げてゐる。

(註五) Ibid. p. 36.

(註六) Trade and Credit, p. 154.

(註七) 福田博士著「厚生經濟學研究」二〇三頁—二二〇頁

(註八) Marshall "Principles of Economic, p. 5

(註九) 高田博士「著景氣變動理論」三三二頁

四

擬、心理上の誤謬が一の重要な因子となつて、短期間に於ける生産力を不當に擴大せしめる事は首肯し得る所であるが、然らば、そは、如何なる道行きを以て、他の局面即ち生産力の不當なる縮少に到達するものであるか。

樂觀的誤謬と謂ひ、悲觀的誤謬と謂ふも、そは利潤の期待を過大に或は過少に計量する事であつて、從て、生産活動力に直接に影響を與ふ。「樂觀的誤謬の影響を受けて發展せしめられたる活動力は結局に於て、販路を需むる貨物の形に具體化せられる。」誤謬の極度の發展は、生産力を極度に發展せしめ、其の結果生じたる貨物は、果して心理的變動に基て行ひたる生産の増加の正當なりしや否やを檢照する事となる。然るに、「大體の貨物に、此の檢照が行れ、而して、大體に於て販路の不足が発見せらるるや、樂觀的觀念は動搖を來し、」(註一) 悲觀的誤謬は巨人として生れ來る。されば、樂觀的誤謬の曝露せらるる時機は、生産過剰の時機と結合してゐる。然るに、生産過剰の顯著なるは消費財產業に於てではなくして生産財產業に於てである。然らば、消費財產業は如何なる状態に置かれるか。

好景氣の末期に於て貸銀財は菟積し、不景氣の末期に於て分散する事を以て、ビ教授は既定の事實としてゐる。「註二」此の事實、換言すれば、此の實在因は、如何なる原因に基いて發展して來たものであるか。心理的原因と如何なる關係に立つかに就ては、殆んど説明せられてゐない。ビ教授の

解する所に據れば、誤謬に基くと眞實に基くとを問わず、凡そ利潤の期待に就ての變動は實際貸銀額に對する變動となる。そして其の割合に於て一致してゐる。實際貸銀額の増加即ち消費財に對する需要の増加は利潤の期待の擴大せらるると同じき速度を以て増加する。然るに産業變動に於て主として勞働者が集中せられるのは、生産財産である。して見れば、好景氣の進行と共に消費財の需要増加し、其の在荷量は不斷に減少せられる。生産財が生産せられて愈々消費財を提供せんとする所謂懷胎期間を経費すると、樂觀的誤謬は悲觀的誤謬に移る。されは消費財の生産過剰は生じない。却て其の反對の事情の發生が立證される事となる。心理的誤謬の發展に就て詳細を極めたる説述あるに拘らず、之と「相互依存」の關係にある、實在的原因の發展に就て顧慮する所尠きは偏頗の甚しきものである。

(註一) Industrial Fluctuation, p. 91

(註二)

p. 23

五

次に貨幣の用途、信用の便宜は、ピグウ教授の理論中に如何程の重要性あるものであるか。産業變動の原因として「自律的貨幣上の原因」が揚げられてゐる。産業變動は物價の變動と結合し、物價の變動は實在因心理因に基いて生産力の側に變動の生じたる場合に貨幣或は信用の需要を増減し流通期間を伸縮せしめて生ずるものである。如斯き、生産力の擴張とか縮少とかに基かずして物價を變動せしむる原因が所謂貨幣上の原因である。併し乍ら、其の原因としての重要性は殆んど顧みられて

ゐない。貨幣の需要計劃に變動なき事を條件として考えて見ると、其の供給計劃に於ける變動は頗る微弱なものとなるのである。

生産活動を増進するに要する所の流貨資源は如何にして獲得せらるるやと謂ふに、それは(一)事業家が彼自身の貨幣を以て之に充てゐるか(二)一般公衆より借入れるか(三)銀行より借入れをなすかである。通貨流通額の増大は大體に於て貨物生産額の増加と一致する(英國に於て)故に物價を騰貴せしむるものは、流通量ではなくして流通速度の増加である。(註一)好景氣に際して物價が騰貴すると事業家は資金の借入人として、頗る有利なる事態の發生に由つて莫大なる利益を獲得する。即ち資金の貸出人は、物價の騰貴、換言すれば、貨幣價值の下落を見積る程度は、借入人に比して稍、内輪にするのが普通である。茲に於て、事業家が過去の契約の履行に據つて利益を收受する。(註二)此の事は彼の樂觀的態度を助長せしめ、從て、資金の借入額は更に増大し、物價を騰貴せしめ、再び利益の獲得となり「生産活動力擴張の累積的傾向は開始せられ……何等か外部的障礙の發生する迄は繼續するものである」之に據つて明なる如く、物價の變動は産業變動を構成する一の重要な要素をなしてゐる。

景氣變動論上の金融説を代表するホードレイ氏は此の事實を如何に見るか。ホ氏は謂ふ。

信用の擴張とか、預金殘高引出に依つて生ずる消費者所得の増加の直接の結果は、現存價格を以て販賣せらるる財貨の額を増大せしめる。販賣額の増加が直接の原因となつて活動力を増大せしむる。而して、物價が騰貴するのは、需要の増加に對して、生産の増加が其の歩を一にし得ざる徴候

である。預金残高より支拂われると、新規信用の創設によるを問わず、總て支拂われたる貨幣は、生産に従事するものの収入となると同時に需要として再現する。生産活動力が大なれば、大なる應にして需要は増加する。所謂累積的運動なるものは物價の騰貴に依存するものではない。ピ教授に於ては、此の累積的運動は前述の様に、事業家が物價の騰貴に由つて、吹き落ち果實 (windfall gain) を獲得する事に存するけれ共、ホ氏は此の運動は「需要が在貨量によるか或は、生産増加に依つて充足せられる時即ち、物價の騰貴が未だ生じない時に當つて既に發生するものである。」(註三) 更に之等の事情を詳言すれば次の如くである。

生産過程中にある貨物の形式を採る所の流動資本の増加は貨幣の供給に依つて行はれる。然るに支拂われたる貨幣は、他方、貯藏せられて居る精製品に對する需要となつて現れる。此の事は價格の騰貴を齎す事なく、需要が満足せられる限りに於ては、何人にも損害を與えない。從來遊賊せられてゐた貨物は、新に消費の用に供せられ、流動資本の一項目として生産過程中の財貨に依つて換置せられる。されは全社会に存する流動資本の量に變化はなく、消費に對する生産の割合は少くはなるが、其の不足は、精製品の貯藏量に現われる。此の精製品の不足は活動力増加の直接の刺戟となる。其の不足が愈、甚しくなり、供給量の杜絶を生せしむる恐れある時は、商人は自衛の策として、換置價格 (replacement value) 以上に價格を騰貴せしむ。(註四) 價格の騰貴は流動資本の増加分を獲得する事となる。此の事は貨幣的運動の結果ではあるけれ共其の事自體は財貨の測に於ける「物理的事實」である。生産者價格の騰貴は貨幣的運動ではあるが、然もそは何等流動資本の増加分を

齎すものではない。若しも、物價騰貴による吹き落ち果實の利得がありとすれば、それは單なる附加的利潤に過ぎない。個人の立物よりすれば、貨幣及銀行信用は何れも流動資本と見られる。生産者が其の生産を遂行する上に種々なる支拂を行ふ爲めに流通資源を要するけれ共、其要求を達成するものは、結局支拂の手段の獲得である。支拂われたる通貨は結局に於て消費財に對する需要を形成するが、支拂人たる生産者或は通貨の貸出人、又は銀行家は、果して其の通貨が購入し得るに足る所の、充足なる消費財が存在するか否かに就ては全然無關心である。流動資本供給の問題は結局貨幣供給の問題である。ピ教授は、流通資本供給の問題には、物價の騰貴下落が事業家の利潤の期待に影響する事を認める。然し彼は需要(貨幣の名辭を以てする)の縮少擴張が物價變動以前に如何なる影響を與ふるかに就ては全然顧慮してゐない。(註五)

好景氣が賣上高の増加、在荷量の減少と一致するとなす事は明にピ教授が「貸銀財は好景氣に増加し、不景氣に於て減する」と認めてゐる事とは反對してゐる所である。而して、ピ教授が統計上の證明として擧げてゐる所のケエンズ及びバアデー兩氏の研究の一般的結論は寧ろ其の反對を述べてゐるのである。(Keynes's: Stock of Staple Commodities (London & Cambridge Economic Service Hardy; The Problem of Business Forecasting p. 301-2) 物價騰貴が産業變動に對して有する重要性に關する兩者の見解の相違は以上の通りである。ホ氏は更に進んで貨幣的要素殊に信用機關の存在を除外しては、ピ教授の所謂樂觀的誤謬及び悲觀的誤謬はよし生じたに於て、それが必然的に一般化するとか、或は累積的運動を構成するとか謂ふ事は全然不可能であつて結局早世すべきもの

である事を證明せんとするのである。

ビ教授によれば、樂觀的氣分が或る方面に現われたる場合に、其の生産活動力を増加するが爲めに要する流動資源は事業家自身の所有する、貨幣を以てするか或は一般公衆より借入るか、又は銀行の貸出を受けるか何れかである。若し、銀行の貸出以外の方法に訴ふる時は、そは、消費者支出の方向を轉換するに止つて、一般的活動力の増加とはならない。即ち此の場合提供せられたる貨幣は提供者の消費財購入に對する支出を減少せしめて、需要者の支出を増加せしめる。従て、一産業は活動力を増加するも、夫れと同じき割合を以て他の産業を萎微せしむるが故に、全體として見る時は活動力に何等の變化はない。之に反して銀行信用を利用する時は消費者の所得は絶對的增加を來し、従て、生産活動を向上せしむるのみならず、之を一般的のものたらしめる。

ビ教授は、樂觀的誤謬悲觀的誤謬の傳染性に就て、頗る詳細なる説述し、強調してゐる事は前述の通りである。今假に樂觀的氣分が如斯き傳染力の効果を充分に發揮し、且其の結果更に大なる銀行信用に對する需要が生じたるに拘らず、銀行は新規信用の創設を拒絶したりとする。若し此の場合に通貨の流通速度が不變なりとするときは如何なる事情が発生するか。

勿論此の場合に於ても、或る程度の生産力の増進は考え得られる。生産者は彼自身の樂觀的氣分に動かされるか或は樂觀的商人よりの注文に由るかして、其の生産額を増加する。然し乍ら、銀行は、資金の融通を拒否してゐるのであるから、一切の生産費は、總て自個の収入を以て支辨しなければならぬ。其の結果彼の事業外の目的に對して、支出せらるべき金額は減少せられ、彼の使備

せる労働者の収入の増加となる。すると社會全體としての精製品需要額は不變なるも其の生産額は激増する。消費せられざる過剰生産が到る處に生ずる。樂觀的氣分が一般的となるに應じて、其の勢は益々助長せられる。然らば、此の増大せる在荷量は樂觀的氣分に對して如何なる影響を與ふるか。ビ教授によれば、樂觀的誤謬に基き、生産力は、其の増加せる生産力が市場を需むる商品の形に具體化せらるる「や直ちに減少するものである。」此處に何等かの懐胎期間なるものを考え得る。其の期間の終了は豫想と結果とを照應すべき時機である。其の照應の結果大體の貨物の販路の不足せる事が發見せらるる時は、樂觀的氣分は動搖する。然るにホ氏は、懐胎期間の後に照應の行はるとなす事を以て不當なりとし、「販賣は常に生産と同時に行はれる。樂觀的氣分は當然、現在の販賣額以上に生産の行われる事を意味するものでなければならぬ。故に悲觀的氣分が現實化するに至る迄の中間期間は、懐胎期間と何等特殊の關係を有するものではなくして、樂觀的商人が其の手許に存するに至る所の過剰なる在荷の量に依存する。」註六 樂觀的氣分は單に現在の生産額増加の形を採るのみならず、又將來の生産増加を行ふべき目的を以て、設備の擴張を行ふ。ビ教授によれば、例令、生産に二箇年を要する紡績機械の注文が發せられたとする。其の注文を發したる商人は、二箇年後に於て新規の機械を用ひて満足すべき需要の増加を豫想してゐるのではあるけれ共、彼は、其の需要か突如として二箇年に増加するものではなくして、徐々として其の期間中に増加する事を考えるものである。然らば前記の様に商人の手許に消費せられざる在荷量が着々増加する時は、勿ちにして、其の豫想の不當なりし事を自覺して、悲觀的氣分を有するに至る。

要するにホ氏の立場よりすれば、銀行信用の供給せられざる限り産業變動は全然其の意義を失するものである。然るに銀行信用の供給は銀行の現今準備金比率に依つは大體左右せらるるものであるからして、銀行の状態が決定的要素となる。(註七)

(註一) ビ教授は、此の點に就て、スナイダ氏が米國の材料に就て研究したる方法を採つた。即ち後者は貨幣の流通速度と事業量とが時間的關係及び振幅の度合に於て密接なる關係ある事を發見したる結果、物價に對し貨幣數量のみが中和せられざる從價を與ふる要素として残つた事實を指摘せるに對し、前者は、物價の變動率と信用額の變動率と就職率指數とを比較したる結果、後二者の振巾等しきに反して物價曲線は方向を同じくするも振度は遙に大なる點を指摘して、物價は流通速度の變動によるを歸結する。(Industrial Fluctuation, p. 168)

(註二) Ibid. p. 173.

(註三) Trade and Credit, p. 156.

(註四) " p. 157.

(註五) " p. 158-9.

(註六) " p. 165.

(註七) 今便宜上兩氏の立場を簡單に示すに次の通りである。

ビグウ 樂觀的誤謬……銀行信用
一般公衆よりの借入
騰貴……過去の契約履行による利益……樂觀的誤謬……

ホートレイ 準備金比率の向上……信用の擴張……消費者所得の増加……
消費者支出の増加……生産活動力の増加……物價の騰貴……信用の擴張……

アリストテレースよりオレームに至る

貨幣理論の發達

萩原吉太郎

はしがき

貨幣理論が純然たる科學的見地より論究せらるゝに至れるは十六世紀以降の事に屬すと雖も、其の主要なる研究題目は夙に殆ど悉く論及せられたるなり。唯時代思潮の反映の結果として、其の論述に倫理的又は神學的色彩を免れざりしと雖も、十六世紀初頭の貨幣理論の内容を成すものは、實にかゝる時代の議論の集積に外ならざりしなり。

初期の貨幣理論は三つの時代を劃して發達したり。第一は古代希臘並に羅馬時代、第二は暗黒時代、第三は十二世紀より十五世紀に至る時代なり。第一の時代のうち、古代希臘に於ける主要なる論者はクセノフォン、プラトーン並びにアリストテレースにして、後の二者は倫理學又は政治學の裡に斷片的に論及したるが故に、其の陳述は倫理的色彩濃厚なり。而して其の論點は貨幣の起原、職能、素材の根本的問題に關するものにして、又クセノフォンは貨幣價值に論及したり。次に羅馬